

# キネマ Kinema Kobe コウベ

—日本映画史余話 4

西宮を流れる武庫川のほとりに立つ、武庫川女子大甲子園会館。モダンな建築は1930年の落成時、「甲子園ホテル」といった。かのフランク・ロイド・ライトの高弟・遠藤新の設計で、ライトの設計した東京の帝国ホテルと並び称される、西の社交場だった。

「このホテルが日本語スーパー字幕翻訳監修という新しい職業の誕生の地」だと、スーパー字幕の第一人者・清水俊二は感慨深げに書いている(映画字幕五十年)。

31年10月、MGM大阪支社宣伝部長だった清水は、甲子園ホテルに電報で呼び出される。ロビーにいたのは、キネマ旬報主筆だった田村幸彦。スーパー字幕の第1号「モロッコ」(31年2月公開)を手掛けた人物だ。ニューヨークでパラマウント社の字幕を作る気はないか。この誘いが、字幕屋誕生の一こまだった。

ハリウッドのメジャー各社は、

活動弁士・井上陽一さん(左)は23日、1月で幕を下ろす故郷・姫路の映画館「シネ・パレス山陽座」で舞台に立った。この日で公演回数は533回。師匠・浜屋波から独り立ちしたのは1979(昭和54)年5月26日のことだった。

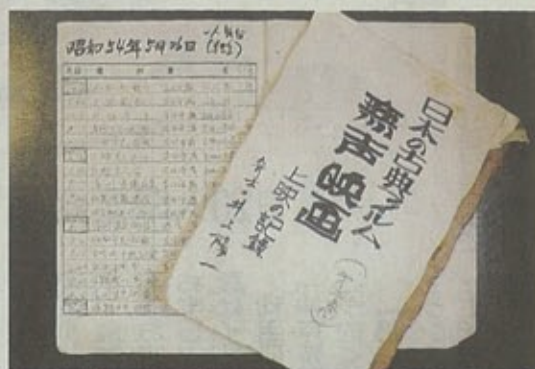
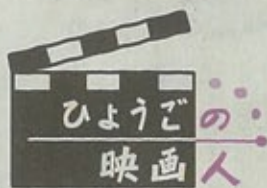
(聞き手・田中真治)

最初の一人舞台は加古川刑務所。動いとった高砂の相生座に移動映写用の35mmがあった。東播の学校とかに行きよった。刑務所もよう知ったから、いつか活動写真やるわって。下手やったらヤジが飛ぶから、度胸つけようと思ての。ところが受けたんよ。ほんていつかんに気い良うしてもうた。

しゃべりは、浜屋さんの舞台の

## 活動弁士

### 井上 陽一さん



横で覚えるわけや。口調は教えとてくれた。拍手もおおて思たら、ヤマをつくれ。見えを切る。立ち回りのきつかけのことや。

## 関西は七五調、とにかくアク強く

「高田の馬場に血煙上がる」とガーンと上げたら、客がのってくんねん。

「愛刀関の孫六斬走れば、腕は覚えの馬庭急流」、クックンと上がってるやん。そいで最後に

のお邪魔でござんした。二度とおかみさんの前には参りやしやせん」。こういふときはグーツと上げてメリハリつける。泥くさいのが活動写真のせりふや。

関東と関西の弁士では、全然違うねん。関西は七五調。とにかくアクが強い。客が泣かんだら泣くまで言え、と。せりふは字幕で出るけど、字幕のないところまで言わなアカン。そこへ伴奏が入ったら、余計シーンとくるよになんねん。

楽団もな、1秒遅れたら客がこけてまう。「幕は切つて落どされた」言ったら、ドドンと、すく入ってくれなアカンねん。だからワシがテープでやる時はちゃんんと頭出ししててな、ホンマ、気使うで。(続く)



### 作品データ

監督・福西ジョージ/脚本・山本三八/撮影・平野好美/出演・里見明、歌川絹枝ほか

## 甲子園ホテルで翻訳者スカウト 字幕で洋画興行軌道に

30年にはサイレントからトーキーに移行しているが、日本では弁士と楽団による上映が続いていた。だが「モロッコ」のヒットによりパラマウントはスーパー字幕化をいち早く決断する。

当時、洋画のプリントはすべて外国から送られていた。スーパーを入れる現像所も、日本にはまだなかった。字幕をスライド投影するサイドタイトルは、読みづらさと操作ミスがつきまどった。

### 「一粒の麦」(1932年公開)

吹き替えを試みたのはフォックス社。日系移民の発声に難があり、根付かなかったという。清水はコロムビア、ユナイテッドの作品を含む44本を手掛け、33年5月に帰国。極東フィルム研究所(現イマジカ)でスーパーの製作が可能になったためだった。

「君の瞳に乾杯」(「カサブランカ」、高瀬鎮夫訳)、「今夜の酒は荒れそうだ」(「第三の男」、秘田余四郎訳)のような名せりふは、こうした制約から生まれた。だが、そもそもなぜ東京出身の清水が関西に来たのか。



甲子園ホテル時代の姿をとどめる武庫川女子大甲子園会館。国際合作映画の先駆け「新しき土」をはじめ、現在もロケに使われている

23年の関東大震災で映画製作は関西に集中した。撮影所、監督や俳優が移り、キネマ旬報編集部も西宮・香櫨園に移転した。外国映画会社も、パラマウントが商船ビル、ユナイテッドが明海ビルに避難したのを皮切りに、ユニバーサルを除く6社が神戸に本拠を置いた。「図らずも映画の都」と神戸新聞(24年8月30日付)は報じる。神戸は封切り場となり、オリエンタルホテルの試写会には少年時代の淀川長治も通った。

「ブラザースに入社。トーキー化により検閲用の翻訳台本を作る仕事に携わった。宣伝部長の植原茂一はモダンズム雑誌「新青年」の寄稿家で、谷崎潤一郎との交遊圏に連なっていた。「神戸・阪神間に花開いたモダンズム文化の一環として捉えられる」と羽鳥隆英・神戸映画保存ネットワーク研究員(33)は言う。

興味深いスーパー字幕がある。賀川豊彦原作の無声映画「一粒の麦」(32年)は、和文が映る場面に英語字幕が付けられている。賀川が北米歴訪に持参して前年に先行公開されており、「海外上映を前提にした比較的初期の作品では」と板倉中明・神戸大准教授(41)はみる。だが、時代は国内でのスーパー製作以前。誰が訳し、どのように字幕を入れたのか。資料の乏しいスーパー字幕は多くの謎を秘めている。(田中真治)

東大在学中に映画研究会をつくり、「映画評論」誌の同人だった清水は29年、神戸・瀧道のワーナ

生誕100年記念映画祭 市川崑光と影の仕草 30日~3月11日、大阪・九条のシネ・ヌーヴォ。2008年に92歳で没した名監督を回顧。「モロッコ」のラストシーンが登場する横溝正史原作「悪魔の手毬唄」や堀江謙一原作「太平洋ひとりぼっち」、谷崎潤一郎原作「細雪」など36本を一挙上映。一般1400円。同館☎06・6582・1416

映画のまち太秦90年 2月2~28日、京都・三条高倉の京都文化博物館。太秦のスタジオで製作された、阪東妻三郎プロダクション「坂本龍馬」▽日活太秦「丹下左膳余話 百万両の壺」▽第一映画「四十八人目の浪士」▽新興京都「有馬猫」一など戦前・戦中期の作品12本を上映。一般500円。月曜休館。同館☎075・222・0888

精華千日前キネマ映画祭 大阪・ミナミのトリイホール。無声映画を弁士付きで上映。2月9日=遊花「伊豆の踊り子」▽10日=大森くみこ「散り行く花」▽11、13日=春野恵子「番場の忠太郎 臉の母」▽12、14日=旭堂南海「空の桃太郎」▽15日=澤登翠「雄呂血」一など。各日11、15時から。千円。同ホール☎06・6211・2506

ラボ映画の冒険 日本の構造的物質主義映画 大阪・中之島の国立国際美術館。2月13日13時=大島慶太郎▽同15時=奥山順市・伊藤隆介▽14日13時=末岡一郎▽同15時=能登勝一を特集。無料。同館☎06・6447・4680

◇第4土曜に掲載します。

企画・資料協力：神戸映画資料館 ☎078・754・8039 <http://kobe-eiga.net>